

## 序

郭南燕

2016年11月24日から26日まで、ニュージーランドのオタゴ州首都ダニーデン市（Dunedin）にあるオタゴ大学（University of Otago）との共催で、「南太平洋から見る日本研究：歴史、政治、文学、芸術」をテーマとする第23回の日文研海外シンポジウムを開催することができた。

オタゴ大学は、1869年設立のニュージーランド初の高等教育機関で、当時の移住民（ヨーロッパ人と華人）が南島のオタゴ州で開拓した金鉱業で蓄積した富によるものである。四つの学部（人文学部、理学部、医学部、商学部）をもち、完備した科目を誇るこの世界最南端の大学は、ニュージーランドの他大学より遅れて、1993年2月に日本語プログラムを開設した。

今回の海外シンポジウムは、将基面貴巳教授（歴史学科長）との1年半の共同準備を経て、ニュージーランド、豪州、フィジー、米国、日本からの研究者の参加を得て開催することができたものである。シンポジウム前日（23日）は、米国ペンシルヴァニア大学の Frederick Dickinson 先生の公開講演「The First World War as Global War: Japan, New Zealand and the Dawn of an Asia-Pacific World」があり、シンポジウムの幕開けとなった。ニュージーランドと日本との第一次世界大戦への関わり方を通して、地理的に遠く離れている両国が、政治的、経済的に密接な関係を百年以上もち、アジア太平洋の全体性を作り出していたことを教えてくれる。

24日と25日のシンポジウムでは二つの基調講演があった。初日には日文研小松和彦所長から「ミクロネシアからみる日本研究」と題した講演が行われた。30年前に科研費によって約10年にわたって調査したミクロネシア諸島のキリスト教導入前の家族関係と怪談を紹介し、そこから日本の家族と民話を眺め直して、社会の基本的人間関係への理解がその国の歴史、伝統、文化への研究といかに関係するかという「異文化理解の心得」を示唆する内容であった。この講演は、妖怪研究を大成させた「小松学」の出発点の回顧と整理のきっかけにもなっている。

25日にはオークランド大学の Mark Mullins 教授から「Public Intellectuals, Neo-nationalism, and the Politics of Yasukuni Shrine」と題した講演があり、靖国問題に対する日本知識人の態度の変遷を辿り、日文研創設者の一人で現在も顧問を務める梅原猛先生の公式参拝への長期にわたる反対意見を紹介し、日文研関係者にとって印象深い内容であった。

二日あわせて六つのセッション「日本の古代歴史と文学」「江戸時代の社会と文化」「現代日本の政治と思想」「太平洋諸島と日本」「近現代日本文学と社会」「日本のテレビ、映画、大衆文化」があり、合計23本の発表があった。

中心テーマ「南太平洋から見る日本研究」を反映するように、Dickinson 先生の公開講演と小松先生の基調講演のほか、オタゴ大学の Glenn Summerhayes 先生による「An Austronesian Presence in the Sakashima Islands: an Archaeological Update」は、先史時代の沖縄先島諸島に残るオーストロネシア人の遺跡を通して、太平洋民族の移動の考古学的資料を紹介し、Dickinson 先生の「Japan Down Under: “Nanyō” in the Rise of a Global Japan, 1919–1931」は戦間期の日本に与えた南洋の政治、経済、軍事の影響力を究明し、オタゴ大学の Judy Bennett 先生の「After the Plane Crashed: Reactions to the Deaths of Japanese World War II Internees at Whenuapai, New Zealand」は第

二次世界大戦中のニュージーランド抑留日本捕虜の飛行機遭難事件がいかに闇に葬られたのかを振り返り、フィジーにある南太平洋大学の Ryota Nishino 先生の「*Toward a Future of Travel Writing and History: Collecting, Researching, and Reflecting on Southwestern Pacific Islanders' Experiences of the Pacific War*」はパプア・ニューギニアとソロモン諸島への日本軍侵略の史実がいかに現在の日本人旅行者に語られ、記録されているのかを考察し、関西大学の Alexander Bennett 先生の「*The History and Influence of Japanese Budō in New Zealand*」は日本の柔術が19世紀末期からイギリスと米国を経てニュージーランドに輸入されて広く歓迎されたことを、新聞・雑誌の記事と映画を通して論述し、オタゴ大学の Henry Johnson 先生の「*Japan in New Zealand: Taiko and Identity in Transcultural Context*」はニュージーランドにおけるさまざまな和太鼓の演奏グループの様態を紹介し、2015年のオタゴ大学の卒業式に和太鼓の演奏があったことを教えてくれた。以上のように、日本と南太平洋との歴史的、地理的、民俗的、政治的、軍事的、文化的関係に焦点を絞ったものである。

他のセッション発表も、日本の歴史、政治思想、文学、大衆文化を取り上げ、高い水準を示している。発表順序にしたがって紹介する。ウェリントン・ヴィクトリア大学の Edwina Palmer 先生の「*Bronze Bells in Early Japan: "Swallowed" by the Mountains? A New Interpretation of Their Ritual Purpose*」は古代日本の銅鐸の語源を探り、その儀礼性への新しい解釈を試み、オークランド大学の Ellen Nakamura 先生の「*Yamawaki Takako's Bittersweet Memories of Uwajima Castle, 1864-1865*」はシーボルトの孫娘山脇たかが宇和島城で過ごした意味を分析し、豪州マードック大学の森山武先生の「*19世紀前半の社会変化と辺境への知の流れ——佐渡人柴田収蔵の読書と遊学、地図製作*」は、佐渡出身の知識人の作成した世界地図の影響範囲を論じたものである。

将基面貴巳先生の「*Debating Japanese Patriotism in the Global Context: Alfred Ligneul and the Controversy on *The Clash between Education and Religion**」は井上哲次郎の「教育と宗教の衝突」に対するパリ外国宣教会のリギョール神父の観点を紹介し、この有名な論争を初めてグローバルな文脈に位置付けている。マードック大学の Sandra Wilson 先生の「*What Difference Did the Second World War Make to Japanese Nationalism?*」は第二次世界大戦が日本のナショナリズムの発展にいかなる影響を与えたのかを論じ、オタゴ大学の Vanessa Ward 先生は、「*Taking the Ordinary People Seriously: The Institute for the Science of Thought and Democracy in Early Postwar Japan*」において、雑誌『思想の科学』の人々の思想と活動を紹介している。

シドニー大学の Mats Karlsson 先生の「*The Noble Art of Procrastination: Writer's Block as a Motif in *watakushi shōsetsu**」は私小説に繰り返し現れる作家の創作困難に関する描写の意義と様式を論じる。カンタベリー大学の Susan Bouterey 先生の「*Okinawa's Fictional Landscapes: A Reading of Medoruma Shun's *Suiteki* (Droplets)*」は沖縄出身の作家目取真俊<sup>めどるましゅん</sup>の芥川賞受賞作「水滴」における沖縄の空想された風景と戦争の記憶を考察する。豪州ウーロンゴン大学の Helen Kilpatrick 先生の「*Fostering Empathy for Non-human Species in Post-3.11 Fiction for Young People*」は、東日本大震災後の少年読者を相手にする『希望の牧場』の動物描写のもつ現実世界の風刺を分析している。

ヴィクトリア大学の Emerald King 先生の「*"And I'll Form the Head!" Cosplay as an Translated Process*」は、コスプレの定義、文化的意義、「文化翻訳」としての意味を熱く説明する。ワイカト大学の Alistair Swale 先生の「*Shinkai Makoto: The "New Miyazaki" or a New Voice in Cinematic Anime?*」は、アニメ作家新海誠の作品を取り上げ、アニメに反映された日本の政治と社会を論じ、日本の現

在の大衆文化をいち早くキャッチする鋭敏さを示している。オタゴ大学の Yuko Shibata 先生の「Floating Travelers to and from Japan in *Cape No. Seven* and *If You Are the One*」は、中国人の日本旅行ブームの火付け役ともなった有名な映画『非誠勿擾』と日本の著名な歌に通じる社会的背景の異同を分析する。

日文研からも五人が発表している。荒木浩先生の「〈妊娠小説〉としてのブツダ伝——日本古典文学のひながたをさぐる」は東南アジア伝来のブツダの子供誕生の諸説と光源氏と柏木の不義の子誕生にまつわるエピソードとを比較し、『源氏物語』がブツダ伝から受けた影響の可能性に言及している。石上阿希先生の「出版物にみる知識の収集と展開——絵入百科事典を中心に」は江戸期の『訓蒙図彙』に現れた万国人物の表象と変遷を取り上げ、当時の社会のもつ海外知識の一端を示す。John Breen 先生の「Ise's Modern Transformations: A Spatial Approach」は伊勢神宮の俗的空間と聖的空間の形成の過程を比較研究する。北浦寛之先生の「草創期の日本のテレビ・ドラマ制作——映画との比較の中で」は初期のテレビ・ドラマ『私は貝になりたい』の構造、モチーフ、製作を論じる。

井上章一先生の「現代風俗に見るキリスト教」は、女性ファッション雑誌の読者モデルの出身校の大半がミッション・スクールであること、日本の偽教会で偽牧師の前で愛を誓い、結婚式を挙げる日常的現象を例に、日本社会がいかにキリスト教の外的イメージに憧れているのかを考察するものである。関西大学の Alexander Bennett 先生は、自分も留学生だった時に、アルバイトとして偽牧師をしたことが何回もあると告白して、場内を賑わせた。井上先生は大方の人に見過ごされがちな社会現象を見つめ直す機会を提供してくれているが、その主旨が誤解されて、女性を性的対象として扱っているというコメントがあった。異文化理解は往々にして誤解を伴うものだと改めて思わせられる。

今回のシンポジウムは、日文研が南太平洋の日本研究と協力し、それを支援する姿勢が明確に打ち出されて、南太平洋の諸大学の日本研究の展開にとって非常に意義あるものだった。そればかりではなく、米国ペンシルヴァニア大学とオタゴ大学がこれから展開する太平洋文化についての交流のきっかけにもなっている。海外シンポジウムの開催は、広い波及効果があり、「日本研究」だけではなく、グローバルな文化研究にも役立っているようである。本シンポジウムを支援してくださったオタゴ大学と在ニュージーランド日本国大使館にも深く感謝を申し上げます。

本論文集は、学術的レベルを確保するために、研究発表時の原稿そのままではなく、査読者たちの厳しいチェックを経たものであり、書き直しが多く行われているものと、査読によって淘汰されたものがある。過去数年、『海外シンポジウム報告書』の編集を経験してきた私は、本号はもっとも高い研究水準に達したものだと思う。この場を借りて、匿名の査読者たちにお礼を申し上げる。なお、本論文集の編集に、日文研出版編集係の伊藤桃子氏に多大な尽力をいただいた。深甚なる謝意を表わしたい。